

医家と神仙家と生薬の基源

御影 雅幸

漢方生薬には古来異物同名品が多い。原料となる動・植・鉱物、薬用部位、採集時期、産地、加工方法、等級、新旧などの相違があり、歴史上多くの異物同名品が存在し、時代とともに変化してきた。

中国医学において、現代に残る最古の薬物書は『神農本草経』である。内容は当時盛んであった不老長寿を願う神仙思想的要素が濃い。一方、『傷寒論』『金匱要略』など当時の治療法を記した医書は当時の医師によって書かれた。ここでは当時の医師を「医家」、神仙思想家を「神仙家」としておく。梁の陶弘景は『神農本草経』を校定し、さらに医家によって書かれた薬物書『名医別録』をも校定し、両者を合して自注を加えて『神農本草経集注』を著した。そこには同一薬物においてしばしば矛盾した記載が見られ、医家と神仙家で異なる基源（生薬の原料となる動植物、薬用部位、加工方法など）の生薬が使用されていたことが窺える。

演者はこれまでに10数種の漢方生薬の歴史の変遷を考証してきた。これらの研究を通じて、古来医家と神仙家が同一薬物名で異なる生薬を用いていた場合、現在に伝わっている生薬の多くは医家が使用してきたものであるという考えに至った。以下、その根拠となった本草考証結果を示す。

1. 木通（モクツウ）

現行の『日本薬局方』では、「木通」をアケビ科のアケビ *Akebia quinata* 又はミツバアケビ *A. trifoliata* のつる性の茎であると規定している。一方、神仙家がまとめた後漢時代の『神農本草経』に「通草」の名称で収載されているものが木通の原名であるとされ、このものはウコギ科のカミヤツデ *Tetrapanax papyrifer* の茎髓であった。唐代の

『新修本草』に「有五葉其子長三四寸核黑穰白食之甘美」とする記載があり、このものは明らかにアケビを記載したものである。精査した結果、唐代の医家がアケビの茎をカミヤツデ由来の通草と区別するために、原名の「通草」を「木の通草」の意味で「木通」に名称変化したと考証した。

2. 山茱萸（サンシュユ）

現在市場の生薬はミズキ科のサンシュユ *Cornus officinalis* の果実に由来する。サンシュユの木は庭木としても親しまれ、早春に細かな黄色い花を、秋にグミに似た赤い実を着ける。一方、植物学者の牧野富太郎は漢名「山茱萸」にサンシュユを当てるのは正しくないとし、和名としてハルコガネバナやアキサンゴを提唱した。『図経本草』には「葉似榆花白」とあり、牧野が山茱萸はサンシュユではないとした根拠であると思われる。演者が精査した結果、神仙家が使用していた山茱萸はバラ科のシナミザクラ（カラミザクラ） *Cerasus pseudocerasus* の実であったと考証した。

3. 連翹（レンギョウ）

現在使用する漢方生薬「連翹」はモクセイ科のレンギョウ *Forsythia suspensa* の果実で、日本でも公園などで普通に見かける低木である。『新修本草』に「有兩種大翹小翹大翹葉狹長……花黄色可愛生下湿地……，小翹生崗原之上葉花実皆似大翹而小細」とあり、これらはそれぞれオトギリソウ科のトモエソウ *Hypericum ascyron* とオトギリソウ *H. erectum* であり、神仙家が用いていた連翹であったと考えられる。これらの植物は草本であるが、果実はレンギョウの果実に酷似している。

(令和元年12月六史学会合同例会)